

30代の悲劇

矢野 眞和

「正」社員は、時間を「正しく」使っていないように思う。誰が「正しい」社員であるかが分からないのと同じように、何が「正しい」使い方であるかも分かっているわけではない。しかし、どう考えても「へん」なのだ。

私が、生活時間研究をはじめ手がけたのは、35年ほど前のことである。高度経済成長の真っ盛りだったが、同時に、経済成長の歪みが社会問題化した頃である。生活の質は「お金」では計れない。「お金」に代わるものさしを求めて、社会指標の構築が模索されていた。膨大な指標群を網羅的に集めるよりも「一つで測れる有力なものさしがある」。それが、「時間」である。万人に平等に与えられた24時間の使い方に、個人の、そして社会の選好が反映されているからである。生活時間に関心をもったのは、そういう時代状況からだった。

その時点の調査結果を国際比較して驚いたのは、日本人の働きすぎと睡眠不足だった。これでは生活の質が高いとはいえない、と思ったものである。それから20年ほどたって、同じ調査を同じ都市で実施した。時間の使い方が変わったといえば変わった。何よりも土曜日に働く者が少なくなった。しかし、週休二日制の浸透を除くと、変化よりも不易が私にとっての大発見だった。とりわけ、「平日」が何も変わっていない。むしろ、平日は忙しくなった。『2005年 NHK 国民生活時間調査』の平日をみても、10時間以上働く者の比率は、この10年に増えているし、睡眠時間は、1970年以來、減少し続けている。

生活のゆとりは週末にあるのではなく、平日という「日常性」の中にある。日常の時間を変えなければいけない。この十数年来、そう言い続けてきたが、「平日のゆとり回復」説は、さっぱり世間に受けなかった。特に「正」社員の男性にはまったく受けない。

「平日」に世間の関心が払われていないことは、総務省の『社会生活基本調査報告書』の集計方法

にも現れている。報告書は、一週間の平均時間を算出し、それを「週全体」として表示し、詳細な結果が報告されている。しかし、私の分析経験からすれば、「週全体」の集計を用いても、生活をリアルに理解するのは難しい。

この2001年調査の報告書に掲載されている「平日」は、性別・年齢別に限られる。男子有業者の仕事時間が最も長いのは、30代後半の9時間8分。次いで長いのは、30代前半である。30代後半の余暇時間を足し上げると、3時間18分である。これでは、「テレビ」と「新聞」と「家族との会話」で終わりである。10時間以上の労働時間が常態である大都市の正社員の平日の自由時間は2時間に満たない。「食う寝るテレビ」の日常性だ。

30代は、子育てと住宅問題をかかえて、一番大変な時期である。働かざるをえないといえそうなのだが、これほど時間が劣化していると、家庭生活がもたないのではないか。それでも、平日のゆとり説が受けないのは、彼らが「家事」を忘れることが出来るからである。30代後半の平均家事時間は5分で、家事をしている者は7.7%である。家事をサボる口実のために仕事をしていると邪推されても仕方がない。平日の自由時間不足を深刻に受け止めるのは、「フルタイムで働いている子育て期の女性」だけである。

30代の悲劇は、日本の家族を象徴している。時間の劣化だけではない。学校の私学化と塾の教育費が重なって、日本の家族は、お金からみても疲弊している。30代家族の悲劇的な生活を正（糺）さないと、日本の家族が、そして日本の社会が危うい。生活の質の向上と時間の使い方問題は、35年前から何も解決されていないように私には思われる。「お金から時間のゆとりへ」という流れの先にある第三の資源は「友だち」だと考えてきたが、時間が劣化しているようでは、「友だち」もできない。